

令和元年6月17日現在

機関番号：34418

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K02496

研究課題名(和文) 発話末詞「ね」「よ」「よね」がその後の発話連鎖に与える影響に関する考察

研究課題名(英文) A study on the influence of the Japanese sentence-final particles "ne", "yo" and "yone" on the subsequent utterances

研究代表者

西郷 英樹 (SAIGO, Hideki)

関西外国語大学・外国語学部・准教授

研究者番号：20388482

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 800,000円

研究成果の概要(和文)：終助詞ネ、ヨ、ヨネは会話の中で頻りに現れる言語要素であり、学習者の習得がなかなか進まない学習項目でもある。これらの意味機能に関する先行研究は日本語教育への応用を視野に入れていないものが多く、日本語教育での文法説明は旧態依然のままである。本研究ではより良い文法説明の構築を視野に入れ、同じ状況下の同じ発話にネ、ヨ、ヨネが付いた場合、その後どのような反応が聞き手(又は話し手から)から続くのかを調査した。その結果、先行研究で明らかにされなかった、新たなネ、ヨ、ヨネの特徴を浮き彫りにすることができた。予定よりデータ収集に時間がかかったため、今だ未分析の収集データが残っており、引き続き分析が必要である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ネ、ヨ、ヨネは円滑なコミュニケーションを行う上で欠かせない言語要素である。これらを欠くと、独り言を言っているような、まるでロボット的な発話になってしまう。今後、様々な形態で来日し長期滞在する外国人がさらに増えることが予想される中で、質の高い日本語学習の環境整備の重要性も増していくであろう。そのような中で、ネ、ヨ、ヨネの明瞭かつ実用的な文法解説の構築は喫緊の課題である。ネ、ヨ、ヨネを会話で使う目的に焦点を当て、発話連鎖からネ、ヨ、ヨネを考察した本研究はこの課題の解決に寄与できればと考える。なお、本研究の一環で実施した談話完成テストで得られたデータは電子化し、無償配布している。

研究成果の概要(英文)：The sentence-final particles ne, yo, and yone are linguistic elements that frequently appear in conversation and are grammatical items with which Japanese-speaking learners have difficulty using appropriately. Most of the previous research on these particles does not take into consideration the application in TJFL (Teaching Japanese as a Foreign Language), and grammatical explanation of the particles in TJFL has remained unchanged for decades. This research, which is meant to help construct better grammatical explanations of the particles, was conducted to investigate how native Japanese speakers and learners of the Japanese language respond to the same utterance in the same situation, which was accompanied by ne, yo, and yone. As a result, the research highlights new features of the particles that were not revealed in the previous research. As it took more time to collect data than planned, some collected data remains unanalyzed.

研究分野：日本語教育

キーワード：日本語教育 終助詞 発話連鎖

1. 研究開始当初の背景

発話末詞「ね」「よ」(以下、ネ、ヨ)は日本語会話に高頻度で現れる談話標識であり、これまで様々なアプローチからこれらの意味機能に関する研究がおこなわれてきた。80年代後半から90年代前半には、(A)話し手と聞き手の認知状態の一致・対立、(B)情報の帰属、という考えを基にした研究が主であったが、90年代後半から、(C)話し手と発話内容との関係性(認知的処理状況、受容レベル、知識管理など)を基にした研究へと移り変わっている。

現在の日本語教育でなされてきたネ、ヨの文法説明は、(A)話し手と聞き手の認知状態の一致・対立を基にしたものである。しかし、ネ、ヨは初級レベルで導入されるにも関わらず、中・上級レベルの学習者になってもなかなか使えるようにならないことがこれまでたびたび指摘されてきた。学習者のネ、ヨの習得が進まない理由のひとつとして、日本語教育でのネ、ヨの文法説明が「会話でなぜネ、ヨを使うのか」という学習者の勘どころを押さえた意味機能がまだまだ提供できていないことが挙げられる。この原因のひとつとして、これまで日本語を母語としない学習者の視点に立ったネ、ヨの意味機能に関する研究がほとんどおこなわれてこなかったことが考えられる。特に、ネに関して、「話し手は何のために相手に同意を求めているのか」という視点が大きく欠落していると言える。ヨに関しては、相手が未知の情報を含む発話にヨがついたりつかなくなったりする現象は日常的に見られるが、先行研究ではこの点に関して十分に議論がなされているとは言い難い。ネ、ヨと同様に、会話での使用頻度が高いヨネに至っては、先行研究自体が非常に少なく、日本語教科書でもその意味機能に関する記述はどこにも見られない。

本研究代表者(以下、代表者)は、Saigo(2011)で、ネ、ヨに異なる発話連鎖効力(次に何らかの発話を引き出す力)があると主張した。その議論の要点は、ネ、ヨを使い分けることによって、話し手は自分が意図する発話の展開を聞き手に示しているという点である。これまで指摘されてきたようにネは聞き手から同意を求める効力がある。例えば、日曜日の朝、妻が夫に「今日天気いいネ。」とネ発話を用いた場合、夫から「そうだね。」等の同意が続くだろう。しかし、妻がネ発話ではなく、「ねえ、今日天気いいヨ。」とヨ発話を用いて、夫がネ発話と同じように「そうだね。」と返した場合、妻はその応答に満足するだろうか。ここでは、夫から「どっか行く？」など同意よりも発展した発話内容を意図して妻はヨを用いたと考える。または妻が「ねえ、今日天気いいヨ。どっか行かない？」と自分で話を発展させる場合も考えられよう。

また代表者はSaigo(2011)でヨとネの複合体であると考えられるヨネの直接的な意味機能として、発話内容が発展できる価値があることだという話し手の考えに同意を求めることとし、間接的な意味機能としてヨネが付加された発話内容を発展させることだと論じている。

さらに代表者は西郷(2012)で、ネ、ヨ、ヨネが発話連鎖に与える影響の違いをより明らかにするため、日本語母語話者(以下、NS)6名に協力してもらい、パイロットスタディーを実施した。この研究では、談話完成テストを用いて、自然環境下では不可能な同じ文脈下での同じ発話内容にネ、ヨ、ヨネがそれぞれ付加された発話の後にNSがどのような話の展開を作るのかを調べた。

2. 研究の目的

本研究では西郷(2012)を以下の3点で発展させた。(ア)テスト協力者を大幅に増やし、NSだけでなく、学習者(以下、NNS)にも協力してもらおう。(イ)発話を叙述発話(例、「今日、めっちゃ暑い+ネ/ヨ/ヨネ。」)だけでなく、依頼発話(例、「あっ、来週の飲み会、来て+ネ/ヨ/ヨネ。」)も含める。(ウ)同じ発話タイプでもその内容が発話連鎖に影響を与える可能性が考えられるため、叙述発話(「今日、めっちゃ暑い+ネ/ヨ/ヨネ。」)「あ、そろそろ時間+ネ/ヨ/ヨネ。」)、依頼文(「あっ、来週の飲み会、来て+ネ/ヨ/ヨネ。」)「忘れないで+ネ/ヨ/ヨネ。」)をそれぞれ2種類用意する。

3. 研究の方法

(1) データ収集方法

本研究の目的を達成するため、談話完成テスト(ペーパーテスト)を行い、データを収集・分析した。なお、今回の調査で収集したデータは「どのように理解しているか」という内省データである。ロールプレイなどを用いて産出レベルのデータ収集を行うことも選択肢として考慮したが、ペーパーテストと比べると、ロールプレイなどその場での瞬時の反応に関するデータの収集は被験者への認知的・心理的な負担が大きいと予想され、ネ、ヨ、ヨネの使用に対して学習者が持っている知識をうまく引き出せない可能性が高いと判断し、本研究では内省データでの分析に絞ることとした。

本研究で用いる談話完成テスト作成で最も注意が必要な点は、同じ発話内容にネ、ヨ、ヨネが付加されても不自然ではない場面を設定することであった。会話の登場人物の性格や当該の会話までの人間関係などの詳細まで設定することは非現実的であり、ある程度は被験者の想像に委ねることになるのは致し方ないが、場面設定には特に慎重を期する必要がある。

(2) 調査内容

談話完成テストで提示した場面と会話は以下の通りである。

場面 1. 彼女（まき）が彼氏（たけし）に電話をしている

彼女：おはよう、たけし。

彼氏：あ、おはよう。

彼女：今日、めっちゃ暑い+ネ/ヨ/ヨネ。

場面 2. 彼女（まき）と彼氏（たけし）が空港ロビーで自分たちのフライトを待っている

彼女：あ、そろそろ時間だ+ネ/ヨ/ヨネ。

場面 3. 大学キャンパスでまき（女）がサークル仲間のゆか（女）を見かける

まき：あ、ゆか！

ゆか：あ、おはよ。

まき：あっ、来週の飲み会、来て+ネ/ヨ/ヨネ。

場面 4. お父さんと子供（女・まみ）の会話

お父さん：あ、まみの誕生日、来週だけ？

子供：えっ、そうだよ。忘れないで+ネ/ヨ/ヨネ。

□内の発話にネ、ヨ、ヨネがそれぞれ付加されたもの（例、「忘れないでネ」）を提示し、自然な発話の流れとなるように、その後の発話者と発話内容を考え、書いてもらった（図 1 参照）。つまり、調査協力者は 12（場面 4×発話末詞 3）の会話の続きを書くことになる。なお、テストでの場面及び発話末詞の提示の順序はランダムにした。

(3) 調査協力者

関西外国語大学に在籍する NS51 名、NNS（留学生）50 名に協力してもらった。学習者のうち 39 名が交換留学生で中級レベルが 30 名、上級レベルが 9 名であった。残り 11 名のうち、学部生が 4 名、大学院生が 7 名であった。

協力者の母語に関しては、ネ、ヨ、ヨネの習得と NNS の母語の影響との関連性を調査した研究はこれまでほとんど行われてきておらず、NNS の母語がテスト結果にどの程度、またどのように、影響するか、ほとんど予想ができなかった。そのため、本研究では NNS の母語操作は行なわなかった。

図 1. テストシートの冒頭（日本語母語話者用）

(4) 調査手順

複数のテスト実施日時を設定し、協力者の都合のよい日にテスト会場に集ってもらい、談話完成テストに回答してもらった。テストは NS、NNS が 50 名に達するまで続けた（2015 年 7 月に開始し、2016 年 11 月に終了）。

4. 研究成果

全ての作業を代表者自身で行ったため、談話完成テストを用いたデータ収集作業、そしてデータの電子化への作業に多大な時間と労力をかけることとなり、データの分析に十分な時間をあてることができなかった（特に NNS のデータに関してはほとんど手付かずのままである）。研究成果の要点を以下記す。

(1) 収集データの電子化

マイクロソフト社のエクセル 2016（表計算ソフト）を用いて、テストで得られた NS51 人分、NNS50 人分のデータの電子化をおこなった（次頁の図 2、図 3 参照。このデータの電子版は無償で配布している。詳細は西郷（2016）を参照のこと）。談話完成テストの実施背景、テスト内容の紹介、テスト実施手順、またテストで得られたデータの電子化の詳細については西郷（2016）で詳しく紹介した。



図 2. 電子化データ (Microsoft 社 Excel 版) の表紙

行番号	協力者番号	性別	年齢	出身県	場面	発話	ネ音調
1					場面: 大学キャンパスでまき(女)がサークル仲間のゆか(女)を見かける。		
2						まき: あ、ゆか!	
3						ゆか: あ、おはよ。	
4						まき: あっ、来週の飲み会、来てね	ネ音調
6	1	NS1	F	19	大阪	ゆか: え、私行けんって言うたくない?	→
8	2	NS1	F	19	大阪	まき: え、そんな聞いてないで。	
9	3	NS1	F	19	大阪	ゆか: うそやん、あ、それ〇〇に行ったんか。	
10	4	NS1	F	19	大阪	来週行けやんねん、ごめんね。	
11	5	NS1	F	19	大阪		
12	6	NS2	F	20	奈良	ゆか: 今金欠やからちょっと厭しいかも...	↓
13	7	NS2	F	20	奈良	まき: ちよっとぐらい貰したるやん!	
14	8	NS2	F	20	奈良	ゆか: 返せへんし、遠慮しとくわ...	
15	9	NS2	F	20	奈良	まき: そっか、来月のは絶対来てな!	
16	10	NS2	F	20	奈良		
17	11	NS3	F	20	大阪	ゆか: あっ、行く行くー! 何時やっけ?	→↓
18	12	NS3	F	20	大阪	まき: 6時集合やで。	
19	13	NS3	F	20	大阪	ゆか: そっか、めっちゃ楽しみやわー。	
20	14	NS3	F	20	大阪	まき: せやんな。	

図 3. 電子化データの一部

(2) データの分析

① 異なる2つの叙述発話に付加されたネ、ヨ、ヨネが後続発話に与える影響に関する考察 (西郷 2017)

異なる内容の叙述発話の後にそれぞれネ、ヨ、ヨネが付加された場合の後続発話を調査した。調査した叙述発話は談話完成テストで提示した場面1の「今日、めっちゃ暑い」と場面2の「あ、そろそろ時間だ」である。これらの叙述発話の内容は性格が異なる。提示された場面での「今日、めっちゃ暑い」は交感的な側面が強く、「あ、そろそろ時間だ」は課題遂行的側面が強いものである。

NSのテスト結果を分析すると、2種類の叙述発話にネ、ヨ、ヨネが付加された場合、後に続く発話(以下、後続発話タイプ)の種類が以下の6つに分類できることが分かった。

1. 同意タイプ (例、「そうやな。」「そうだね。」)
2. 反意タイプ (例、「えっそうかな。」「え、まだやろ?」)

3. 気づきタイプ (例. 「うそやーん。」「え、もう?」)
4. 展開タイプ (例. 「プール行きたいなあ。」「楽しみやけど、飛行機こわいわ。」)
5. 無関係タイプ (例. 「来週の日曜、どっか行こうよ。」「今日何限授業?」)
6. 連続タイプ [話し手が続けて話す] (例. 「今、何してるの?」「やっと出発できる。」)

後続発話タイプの種類及びその割合が、付加されるネ、ヨ、ヨネ、そして叙述発話の内容 (交感的な内容か課題遂行的な内容か) によって大きく異なることを明らかにした (図 4、図 5 参照)。

そこで、2つの異なる性格を持つ叙述発話 (交感的か課題遂行的か) を NS が解釈をする際に、ネ、ヨ、ヨネがどのように影響を与えているのか、発話連鎖の観点から分析し、考察した。特に、これまで意味機能の棲み分けがなされていると考えられてきたネとヨであるが、その割合こそ違おうが、どちらにも同じタイプの後続発話が現れることを明らかにし、この現象の説明を試みた。

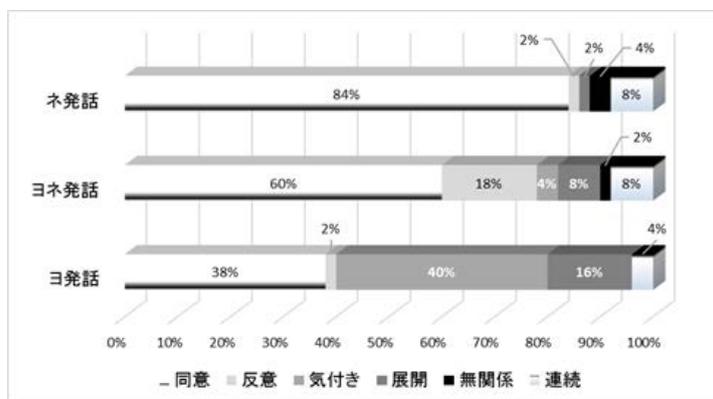


図 4. 場面1 [今日、めっちゃ暑い] の後続発話タイプの割合 (発話末詞別)

② 依頼発話に付加されたネ、ヨ、ヨネが後続発話に与える影響に関する考察 (2018)

叙述発話に比べ、ネ、ヨ、ヨネが付加された依頼発話に関する研究は非常に少ない。また (特に初級レベルの) 日本語教育でも依頼発話にこれら発話末詞が付加された場合の意味機能に触れたものもほとんどない。

そこで、談話完成テストの場面3「あっ、来週の飲み会、来て」(以下、「来て」) にネ、ヨ、ヨネが付加された後、NS がどのような後続発話を作り出したのか分析した。その結果、後続発話タイプは以下の11に分類できることがわかった。

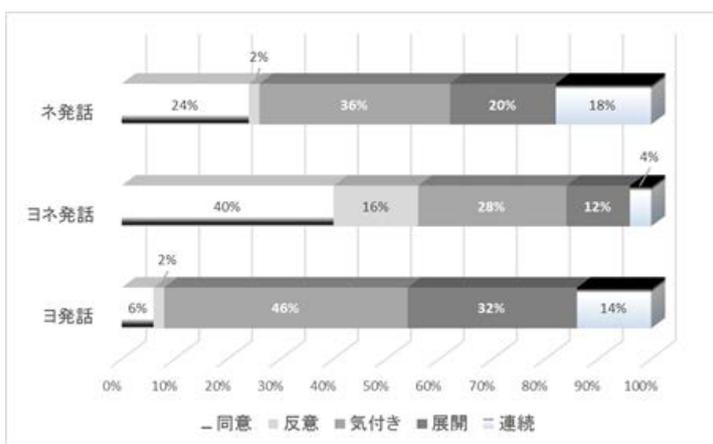


図 5. 場面2 [あ、そろそろ時間だ] の後続発話タイプの割合 (発話末詞別)

1. 承諾タイプ: [聞き手] 明示的な承諾を含む発話
2. 断りタイプ: [聞き手] 明示的な断りを含む発話
3. 既に断りタイプ: [聞き手] 既に断りを伝えた内容の発話
4. 初耳タイプ: [聞き手] 聞くまで知らなかったことを伝える発話
5. 保留タイプ: [聞き手] 依頼に対する返答を先延ばしする発話
6. 質問タイプ: [聞き手] 依頼に対する質問の発話
7. 思い出しタイプ: [聞き手] 思い出しを表す発話
8. コメントタイプ: [聞き手] 依頼内容に対するコメント
9. 謝罪タイプ: [聞き手] 明示的な謝罪を含む発話
10. 無関係タイプ: [聞き手] 依頼発話と全く関連性のない発話
11. 連続タイプ: [話し手] 依頼発話の後に自分で話を続けている発話

表1は、発話末詞別の後続発話タイプとその割合の結果である。この結果から、依頼発話「来て」に付加されたネ、ヨ、ヨネが持つ意味機能の違いが後続発話タイプの種類、そして割合に大きな影響を与えていることがわかった。

表 1. 「来て{ネ・ヨ・ヨネ}。」と後続発話タイプの割合

	承諾	断り	既に断り	初耳	保留	質問	思い出し	コメント	謝罪	無関係	連続	計
来てネ	38	26	2	14	10	2	4	0	0	0	4	100
来てヨ	4	36	0	2	14	34	0	0	0	2	8	100
来てヨネ	42	10	0	8	12	8	6	4	2	0	8	100

(%)

そして、これらの違いを詳しく分析していくことで、これら発話末詞の選択が依頼発話の後に現れる発話の流れにどのように関わっているかを論じた。特に、意味機能の差がさほど明らかではない「来てネ」と「来てヨネ」であるが、後続発話タイプの種類・割合の結果を基にこれらの意味機能の違いを明らかにした。

〈引用文献〉

- ①西郷英樹 (2012) 「終助詞「ね」「よ」「よね」の発話連鎖効力に関する一考察—談話完成タスク結果を基に—」『関西外国語大学留学生別科日本語教育論集』 第 22 号 pp.97-117 関西外国語大学留学生別科
- ②Saigo, H. (2011) *The Japanese Sentence-final Particles in Talk-in-Interaction*, Amsterdam : John Benjamins.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 (計 3 件)

- ①西郷英樹、依頼発話「来週の飲み会、来て」に付加された「ね」「よ」「よね」が後続発話に与える影響について、関西外国語大学留学生別科日本語教育論集、査読無、第 28 号、2018 年、pp. 1-21、<<http://id.nii.ac.jp/1443/00007847/>>
- ②西郷英樹、「ね」「よね」「よ」発話と後続発話タイプ—異なる 2 つの発話内容を用いて—、関西外国語大学留学生別科日本語教育論集、査読無、第 27 号、2017 年、pp. 9-34、<<http://id.nii.ac.jp/1443/00007811/>>
- ③西郷英樹、終助詞「ね」「よ」「よね」の発話連鎖効力に関する一考察—大規模談話完成テスト調査報告—、関西外国語大学留学生別科日本語教育論集、査読無、第 26 号、2016 年、pp. 101-127、<<http://id.nii.ac.jp/1443/00007756/>>

〔学会発表〕 (計 1 件)

西郷英樹、「今日、めっちゃ暑いネ。」に日本語母語話者と非母語話者はどう答えるのか—発話連鎖から「ネ」を考える—、第 10 回日本語実用言語学国際会議 (ICPLJ10)、2017 年 7 月 9 日、国立国語研究所 (東京都立川市)